

頭現場で作業終了時間まで、誰も声も出さずにションボリと元氣のない姿で日暮れの来るのを待つ、なんと情けないことか。俺は今ままでどこでどんな罪悪をしてこんな仕打ちを負わねばならないのかと、戦争というものの罪悪を実感として体験させられている。

抑留体験二年半、まだまだ現場が変わるが、ウランバートルで劇場、大学、領事館、学校と、現在建築されている建築物は日本人抑留者の苦勞の積み重ねである。

日本人抑留者がウランバートルへ一万三千人抑留された。うち死亡者千六百人の犠牲のあることを知って頂きたい。モンゴル、ウランバートルからの全員引揚げは、二十二年十一月末函館港へ引き揚げ完了している。

## 抑留の日々は苦<sup>にが</sup>し、また嘆かわしい

石川県 中田 繁

シベリアに連れられてきて以来、食物不足に悩む収容所内は飢餓地獄だった。保身のためとはいえ、命を延べんがための食物盗人と変わり、またその罪悪感も覚えず、戦争に敗れた惨めさには心も荒んだ。ソ連兵も心が荒み、憎悪を剥き出しにして、獣畜も同様の様相あらわに、自分が本位と零落し、それが人情をもなくさせる悲運と巡りて、さらに個人主義へと走らせた。戦争の歪みは、心を結ぶ人と人との信頼を失わせたのである。

私がソ連軍将校の官舎当番兵につかされたとき、大きな驚きを経験した。主義主張は当然自由にしたが、職権の重さを知らされた。それをこの目で見せつけられた。私には大変な驚きであった。日本兵の管理権の行使は収容所所長に当然あるのだが、いざ実行力とな

るとそれが意外や、また異様なものを感じさせたからである。それは、人事係の少尉が日本兵捕虜の身柄一切の権限は我にありと譲らず、独断専行。所長が権限の浅きにいた現実を見せつけられたのだった。収容所の柵外にソ連の将校官舎（一棟、二世帯式）が並んで建っていた。当然、独身将校二人の同居となっていたのだが、私はこの二人の食事の賄い当番に当てられた。片言のロシア語で炊事についたのだったが、若い人事係（少尉）と中年将校（中尉）の二人は楽しかるべき食事となるところだが、そこに問題を数々起こした。朝な夕なに楽しい会話もなのまま、僚友は譲り合う常識を欠いた。「俺にはカルトーシカの炒めでよい、彼にはやるな。馬鈴薯シチューを作ってやらなくてもよい。俺には多く盛れ」。私はどちらの事も聞かなければならぬ中で、辛いところだった。個人主義の最低で、仲の悪さにはほととあきれさせられた。そこそ宿舎の鍵を捕虜に持たせて安心をしたと言うのである。そこには僚友としての信じ合いが全く無く、心許せないということに尽きる。日本人には考えられない

ことである。ソ連人の特有のものかもしれないが、信と義という心の不在、つまり騙され馬鹿にならぬ警戒心、相手に疑心暗鬼の先行であるように思われた。それは、俺が帰って来るまでは彼に鍵を手渡してはならぬ、部屋に入れるな、であった。「泥棒に鍵」と言うが、ここシベリアでは「捕虜に鍵を渡す」など、誠に変な話だ。私は、義理人情は人間だけが有する本能で、人として所有するものだと思いたい、必ずしもそうでない国の人、そうした人種もあったのだ。

ところで三年送ったシベリア生活から解放、ようやく帰国の途についたナホトカ港では、「同志諸君（タワリッシ）、誠に苦勞様でした。日本へ帰られる（タモイ）今日は本当におめでとう。心からお祝いの言葉を申し上げたいと思います。もはや帝国主義の台頭は許されぬ、アメリカ資本主義と結ぶ天皇制、ファシズムの国に向かって敵前上陸をする諸君らは、人民が建てる人民民主主義国家の建設に向かって闘って下さい」と強調し、「人民がつくる民主主義国家を地球上の人類の幸福のためにこの体験を生かしてほしい」

と結び、「くれぐれも体を大切に、さようなら」と告げたのである。私は、何か得体の知れない、割り切れない感情が走った、悔しさと、込み上げる何かを。そしてうるむ涙に目も霞み、白い波頭のナホトカの港、最終の収容所広場に展開したのである。かの将校も人である。別れの場に一筋の光るものを見たが、今も心に霧と悶えと……。しかしながら、労働大隊二〇七収容所の生活は激しく厳しい冬の最中、炎暑のときは体中が汗かいて乾き、真っ白に塩ふいたが、その体を癒す術もなく、疲れ果てたるも夜遅くまで思想教育を強いられ、反動主義者と罵られた。

忽然として降って湧いたような思想の嵐は、収容所内を荒れ吹いた。社会主義、共産主義を唱えるイデオロギーの台頭はすさまじかった。同じ同志なのに何だ、同じ捕虜だ、日本人だ、何故にと罵り、どうして互いが争わなければならぬのかと、その霧の中に我が身も被われ、消されそうだった。

日本人相討つの哀れを晒した。軍国主義、帝国主義だと決めつけられた。かつては戦友だったその友、朋

友と憎しみ合う悲しいことともなった。反動者と呼ばれ、集會場で高い台に立たされた者。軍国主義者だ、資本主義者は裁き葬るのだとつるし上げられた。自己反省をも強いられて青くなつた者も数多くいた。そして、それらに悩み、自分の行き場もなくしてしまい、死を選ぶという悲しいことにもなった。戦友が振つた赤旗はナホトカへと続いたが、帰国の港に来て望みを目前に命を断たされた者がいたことには誠に断腸の思いであった。お互いに強い執念を燃やして今日まで生き繋いだ。それなのに命を自ら断つた心境をなんと察したらばよいのだろうか。幻か、また夢か、日本人が、同胞がなんとしたことかと思ひ、今も、夢ならばなんなりと偲び続け来た五十余年、この半世紀である。修羅場に立たされ帰れなくなった戦友の御魂安かれと、日々祈るところである。

悔しきは忘れようと努めてきた私だが、あの日から追憶は、哀れ異国の丘に埋もれる戦友のこと。寝台上面にて眠つた遺体がまざまざと目に浮かぶのだが、なぜ一言告げられなかったか、故郷への伝えもあつたら

うに、と。ノルマを終えて帰舎すればすでに遺体はなく、かわりの兵のぼつねんとした座臥姿が現れた。まさに人間部品だった。こんなむごいことであるだろうか。あの日が昨日のごとく思え、やるせない。

齢八十になんなんとするに我はまだ生き肝、<sup>だま</sup>今まで息してこられたこの命尽きるまで、シベリアのことを語り部として綴り伝えたい。無念の死を永遠の記として残したいと思う。

抑留の日々は苦し、<sup>にが</sup>また嘆かわしい。抑留三年の日々に、ハバロフスク、イズベストコーワヤ、テルマの奥地の森林の伐採である。日ごとに増すノルマに追われた捕虜の私たちだったが、今もまだ脳裏に焼きついて忘れられない。

休日のことである。昭和二十年十一月七日、この日はソ連国共産主義国家、ソ同盟の革命記念日であった。既にシベリアのこの地は零下二十度にもなっていた。大地は白一色、至る所、それはスケート場のように凍りついていた。その丘は捕虜收容所の建物が列をなして並んでいた。收容所の四隅に建つ監視塔を仰い

だとき、自動小銃を身構え「撃つぞ」と銃口を向ける兵に手を上げたが、太陽のまばゆい青空に、いや、碧空に散らした氷滴がきらきらと乱舞する光影を見た。自分の吐く息は真つ白、眉毛もしばれついた。口元も歪む。たちまちにして全身は冷え、凍っていった。針葉樹の大木も、また枯木の如く木偶の坊の風景に、はっと驚いた。それらは人の住む所ではなかった。長期間、三年余りも抑留して理不尽を極め、口惜しみを引きつながらされたは余りありて。

昼なお暗い一大森林の野に、こけむした古木（樅）の伐採で、それらは全く危険極まるものだった。倒された大木の下になり、それで死傷者も限りなく出したが、大方の犠牲者は四十歳も越した老兵の方だった。家の大黒柱だった。主人であり、父も母も、そして妻や子供の安否を気づかい、心も安らかでなく、「息災か」と見えない糸を手繰り、神仏に祈り続ける日々だったろう。もしや飢餓にさまよっているのではなからうか。肉親の心の糸は、日々通い続けていたのであった。それらの飢餓に苦しみさまよう姿は、まさに

収容所を生き地獄にしたのである。暗い舎内の二段の板敷き寝台上に、樅の木を燃やす赤い燈火の油炎の煙、その煤がホロホロ、ぼろぼろと舎内を浮遊するのは地獄の図である。そうした三年の日々の中にあって、毎年十一月七日の労働者の祭典「立てよ、赤旗の下に」では、捕虜収容所でもラポータなしの終日休みであった。

レーニン、スターリンの両雄を称えてと言う、日本流で言うならば、それは建国の神様だったのだ。神仏不要のお国だが、私たち捕虜にした扱いは、地獄の中の釜休みともしたのであった。今日は、監視兵の赤鬼、青鬼の怒号に怯えずの一日だった。自由の一日となったが、シラミ潰しに、また衣服、靴下の再々、再々にもする繕いに一生懸命だった。穏やかにも静かなる大休養日となったが、空っぽ腹はぐうぐう鳴るばかり。飯をいっぱい食べたい、お多福餅に、ぜんざいも、戦友と話をするだけの想像腹で足したものだ。実に哀れ、悲しいことなれど、食の足らずは人を人でなくしてしまうことである。恐ろしいことだ。食

わずして、意地も色気もなしの人でなしを獣畜にも変えてしまう現実を露呈したのがシベリアでの現実であった。

ところがシベリアで見た女囚の姿に、明日に向かって生きる女たちを、欧州人の強靱なる思想、忍耐、そして体力を生で見た。それは見せつけられたと言うべきだが、彼女たちの罪刑を聞くと、五年、十年という長期の収容所生活であった。日々の厳しい生活に耐え抜いたその風貌は、男性のごとき容姿と見まごう。彼女らはシベリアの地に住まう人民の大衆だ。ならばこそと思えるのだが、そこには彼女らの生きて行かんとする明るさ、笑みを漂わせて明るいものを見ることができたのかもしれない。この革命記念日の祭典を祝い事にと酔い、公にもして、その乾杯の盛り上がりに驚いた。彼女たちの熱狂する、踊る、跳ねる、それは、軽やかなダンスの妙技と声高な歌声が夜の空にと流れていった。私は、刑務所（収容所）でなくて、巨大な特殊な社会構成なるを見た思いだった。

大食堂は一転して大きなステージに変わる。即席大

ダンスパーティー場となるのであるが、総て種も仕掛けもいらぬのも実に妙なるかなである。彼女らに強いられた労働を癒しめるものは、食後にも夜な夜なに楽しめるダンスでもあったのだ。毎週土日の休日はダンスを踊り、タップに合わせてリズムカルに。また、見ているも、彼女らに何の愁いもその姿に見られないので、何か不思議な思いにもさせられた。マンドリンを弾く天才は珍しくなく、大方のロシア人は共通する何かを有している。アコーディオンとの合奏はプロだ。それに女囚の多くは上手に扱う、手慣れたものを見たが、歌う舞うで興奮の大合奏、合唱で見事なものである。彼女たちが香水を匂わしたのがぶんと食堂に漲る。艶やかに酔いしびれて歌い踊る彼女らに見惚れたものである。

あれから歳月五十年も過ぎたが、今も彼女らのヒールの靴音、硬い音が「コッ、コッコトン、コト、コト」と、リズムが聞こえてくるようである。「カチューシャの歌」にも、さらには戦勝に酔いし戦闘機の歌も甲高く、肩章から吊り下げた皮帯の幅広白い

色、そして黄緑色の淡い色の軍服は、何となくリラックした姿に映った。

これらの歌と舞いに何とも優雅なるを、それが女囚という身の愁いにも思えるその姿の、外から見ればどこから眺め見ても、その顔は喜色満面たりで、ただただ驚きだった。今日の一日は楽しくてか、嬉しさを隠さず、普通の人といった感じを受けたのであるが、というのは彼女らの衣装が、女優か歌手かとも思わすものだったからだ。すけすけの衣装は赤色、黒色に、また白色をあしらう鮮やかな艶姿も美しい。白い柔肌をたっぷり見せつけられた。それらで彼女らは楽しい、嬉しい、年に一度楽しむ心も緩む一日を過ごしたことだった。彼女たちの待ちに待った最も嬉しい日だった。そうした彼女らの無邪気さに私は哀れを感じ、彼女たちの気持ちがわかるのである。何の咎人、その罪で幾年、幾十年ともいうのに驚いた。実に因果な不幸を背負わされたことだと。暗い日々は農作業（コルホーズ）で、馬鈴薯畑で黙々と刑期の終える日々を待っているのである。

女囚という生活を送る日々は、明るく、後ろ向きでなく、さらに一日と望む日の来る明日を待ち、怯えずの姿であることもまた考えさせられた。しかしながら、彼女らはかわいそうだと思った。それは、女性といえども当然のことながら男女の掟があった。統制の厳しい国、これはまた然りである。

お国が違えば食物も変わろうが、西欧人のパン食と同じくするのはとてもじゃなかった。米飯をくれ、とてもじゃないが体はもたなかった。それらはソ連人にはわからない。それで「日本人だ、捕虜にも正月を、もちろんお餅に白銀飯をくれ」だった。ソ連人には、お正月って何のことかで、新年を祝うことなどはなかった。捕虜の私たちはお正月だと叫べども反応全くなしだ。お休み、作業中止だけは認めたのであった。当然お雑煮などあるはずもなく、白米、銀飯なぞもくれなかった。そして、驚いたことに「飯を食わせろ」に、餅どころか糲米だった。それを俺たちに食えと、なんたることだ。それでも食べたさに炊飯をしたが、とても食べられなかった。口に入れ嚙んだが、その汁

だけ喉へ送ろうにも糲のとげがちくちく、口中に刺さった。おう、痛々々、なんてことだ。馬や牛でないぞ。馬鹿かいな、と。ソ連のお偉方は正気なのか？ものには程度がある。私たちは恥辱と憤怒やるかたなしかった。

故里では父や母は淋しいお正月を迎えているだろう。「少なくともシベリアでお雑煮餅ぐらいは食べているだろう、息子よ」と、遙か西の空に向かって祈ったことだろう。それらを思うと情けなく、生まれて以来の元旦だった。父母、兄弟、肉親と別れ、離ればなれに一人侘しくした。

その昔にロシア軍が日本軍に敗れ、日本に連れられて石川県の七尾港で使役されたという老人の話が聞かされたが、捕虜だった私らに粗末なことではしなかった、と私に話してくれた。その老人と奇しくもシベリアで会った。真に奇遇なことであった。この老人がシベリアの流刑地にどうして地方人として住まっていたのか聞けなかったが、おそらく汚名を着せられ流刑になった、そして定住したのかとも思った。後日、その

老人の住宅にて白パンのふかふかを食べさせてもらった。また、野原の地で赤い果実がとれるのだが、砂糖湯の中に入れて飲めば甘酸っぱく、すっきりとしておいしかった。

私はこの目で、この体で、満州の北安の兵営に昭和二十年七月二十日に二等兵で軍律に加わったのだが、なんたること、シベリアに抑留となった。それが北安街を後に、幾千人の将兵がソ連軍の少年のような兵士に追われ、それら梯団が武装も解除され、裸同様にして黒河の河岸を二十日間歩かされて浮浪した。乞食も同様、藁菰を被う姿だった。河岸で油にまみれた流木を燃やせば、煙にむせ狂う。そして真っ黒に煤けた顔が並んで焼き火を囲んでいた。まさか黒龍江をイカダ舟で渡ろうとは。激流の中どん満州から離れてしまい、陸揚げされたのはシベリアであった。延々と貨物車に幾日か、真っ暗な貨車の中はどこを走っているのか、全くの日隠しだった。降ろされた所はテルマの東方の山林地帯の小さな駅。そして小さな町と言うか、村なのか、貯木場を思わず樅の大木が集積されて

いた。それに街工場を見るような建物の屋根に煙突が立ち、白煙がゆるく立ちのぼっていた。

日露の戦に敗れた老人が口ごもった言葉は、「戦争はしてはならぬ、他国を侵してはならない」だった。私の目を屹然と見つめ、そして手指で地面に雪ごと、能登半島の真ん中の入江、七尾の港あたりを描き、私に「お前は日本のどこ、どの辺か、父と母は」と。さらに「兄弟も日本では何の職業か」と問う。当然と言うか、私も石川県の地図を示したが、とても懐かしそうだった。老人は「七尾にいるのか」と、わかったかわからないのか、能登の地図は皆、七尾あたりと思いい、違いがわからずだったのかも。広大なシベリアの地から見れば、日本中が七尾ぐらいに見えるのかもしれぬと思う。

私は現在、あの日、あの頃に馳せる思い、凍地に埋もれる戦友の冥福をひたすらなる思いで書いて偲び、忘れないであらう。合掌……瞑目して。

抑留の日々は苦にがし、また嘆かわしい。